

○新帰化植物ヒメイラクサ (新称) (浅井康宏) Yasuhiro ASAI: On a new naturalized weed, *Urtica urens* L. in Japan

三重県の帰化植物研究家として活躍されている太田久次氏から、検定を依頼されているものの中に小形のイラクサ科の一品がある。一見してミズの仲間を思わせる外観を具えたイラクサを小さくしたようなものであるが、莖葉に顕著な刺毛を有し、皮膚などに触れると疼痛を与えること、我国のイラクサ属の諸種と全く同様である。

ところで昨年 (1974)、筆者は欧米を訪れた折、各地で直接本属の生品について観察の機会にめぐまれ、その際にこれがヨーロッパに広く分布し、また現在、北米合衆国の一部にも帰化している *Urtica urens* L. [Sp. Pl. 984 (1753)] であることに気付いた。

本種は英名を Annual Nettle ともいわれるように 1 年草で、草丈 10~50 cm 許であるが、生育条件のよい場合には、それ以上にもなる。莖は 4 稜形で直立し、また下部で分岐、叢生し、多数の刺毛をもつ。葉は卵円形、有柄で対生し、2~4 cm 内外で、葉縁に顕著な粗鋸歯を有する。初夏から秋にかけて葉腋から密に花をつけた短かい花序を出し、わずかに下垂する。

本種は筆者がヨーロッパ各地で観察したかぎりでは、多少とも湿り気のある平地の路傍や荒地、畑地などに生育しており、しかも寒冷な気候条件を好む傾向を有する。なお現在のところ本種は、三重県で見出されているにすぎないが、将来、我国の関東以北の低湿地に帰化する可能性があり、その具備する刺毛と相まって、好ましからぬ害草となる恐れがある。

また本種の和名としては、前述の草姿からイラクサミズとでもしたかったが、しかし欧米名の Kleine Brennessel や Lesser Stinging Nettle と全体が小さく可憐なことからヒメイラクサなる名を選んだ。 (東京歯科大学)

Summary A small European Stinging Nettle, *Urtica urens* L. was reported from Japan as an alien noxious weed. The plants were found at the first time from Kusu-chô, Mie Prefecture of Western Honshû on May 16, 1963.

○草木性譜と有毒草木図譜の著者名 (久内清孝) Kiyotaka HISAUCHI: On the proper name of the author of the Sômoku-seifu and Yûdoku-sômoku-zufu (1827)

この 2 書は文政 10 年 (1827) に名古屋と大阪とで上梓発売され、当時から明治の中期まで広く行はれたものであることは周知の事実で、著者は尾張藩の舎人清原重巨で、息子の重光が校訂している。さて問題は著者の名が重巨であるか、重臣であるかである。この人の名の上に舎人とあるが、舎人は役名とか職名とかであって、この本の序文をかいた菅原在経という人が文中に尾張藩清原重巨としている通り、これがこの著者の姓と名であって、舎人はタイトルのようなものである。それなのに松村先生の植

物名彙 (1895) には重臣 (Shigeomi) となっている。もっとも上野益三氏の日本博物学史には、さすがに巨に従い字音読の振がながつけてある。しかし本当の読方が果してどうであったかは知るよしもないけれども、本書の校訂に当たった息子の名である重光を訓読みにするのが一考に価するなら、重巨は訓読でシゲタカと読得るように思われる。もっとも、なんでも字音読みでお茶をにごしている、便利主義の今の世には、こんな愚問は通用しないかも知れないから、音読で結構だと思うが、なにはともあれこの著名の名は重巨であって重臣ではない。こんな閑文字は冷笑に価するだけだろうが、たまたま外国の人から query があったのでしるして見た。(東邦大学薬学部)

□1972 年植物分類学関係文献目録 pp. 89, 1974 年 9 月。科学博物館植物第一研究室金井弘夫博士によって種子植物を中心とした植物分類学関係の文献目録 1972 年版が編集された。1970 年まで金井氏の前任者奥山春季氏が編集していたフロラ関係文献目録を継続させた形がとられている。奥山氏の目録は惜しくも中断してしまい、その続刊が望まれていた。今回の金井氏の目録は表題も変わり、全体として集録した文献の範囲を拡げ、内容を 1) 地方別目録、2) 分類群別目録、3) その他に分け、3) には人名という生物学者に関する項目も含んでいる。特に目立つ点は新しく発表された学名、組み合わせ、和名の採用を重視していることで、新名目録たる性格をも備えている。ただし、ここには命名規約上明らかに無効な名や有効性の疑わしいものも含まれており、この目録に登載されているとって有効になるものではない点に注意すべきである。このような意味では、この目録は金井氏が新しく編集した、主として日本人による植物分類学業績目録ともいえるものである。残念な点は例えば田村道夫氏のシラネアオイ科 (Tamura, M.: Morphology and Phyletic Relationship of Glaucidiaceae Bot. Mag. Tokyo 85: 29-41) が落ちてしまったことに示されているが、いくつかの見落としのあることである。この点に関しては事前にまわりの研究者の協力をも得て完全を期する必要があるが、この種の印刷物には本来補遺がつくものでもあろう。

金井氏によればこの、目録は希望者に無料で配布するが、代わりに文献、標本などの資料提供を希望するとのことである。このような基礎的な仕事は日本では評価の低い傾向があり、その費用捻出などの苦勞も多いが、長く続けば続くほど価値のものである。そのための分類学研究者の協力とともに、今後、内容の充実と続けての出版を期待したい。ほぼ同時にシダと種子植物とを対象とした、Kew Record of Taxonomic Literature 1971 も出版された。日本で見ることのできない文献がいかに多いか驚くべきものがある。金井氏の目録中にも容易に見られない文献が散見される。研究、特に新学名などを発表する際には、遠い将来においても外国の研究者でも見ることのできることを条件にして発表すべきである。(大橋広好)